弦だけが光を孕みステージに突っ立っている剥げた
ストラト　松岡秀明

この作者の今月の一連はいい。なかでも私はこの作に注目した。ここはヴァージニア州のクラブ。「のっそりと大きな男現われてギターとる時白い掌（てのひら）」「手榴弾（パイナップル）のピンを外した瞬間に戻り男はブギを弾きだす」など、クラブのステージの黒人男性に取材した作もある。掲出作は、人がいない舞台の不思議な存在感。「ストラト」は代表的なエレキギターのタイプ名。

さつと上げいさざの光る四つ手網能登の漁師は川面をたたく　沢野唯志

下句、なぜなんだろう、という疑問符を読者の心に投げかけつつ、すぱっと終わる気合いがいい。何度も読み返したくなる一首。石川県の春を告げる「いさざ漁」である。いさざは半透明なハゼ科の小魚で、春に産卵のため川をのぼる。イサザを網へ追い立てるために、釣りざおなどで川面をたたくのだという。

雑魚をもて庭に出ずれば猫のいて海の話を少し聞かせる　丸山　稔

海釣りの歌の最後の一首。自分で釣ってきた魚をさばいたあまりを猫にやる場面。下句「……海の話を少し聞かせる」が、なんとも、いい。

進まない船のようなりことごとく行事つぶれた秋の校舎は　清水あかね

学校は、入学式、運動会、学芸会、修学旅行……等々、年間にいくつかの恒例の行事があって、大きな船のように粛々と予定をこなしつつ進んでゆく。だが、新型コロナウイルスの影響で、昨年は（そして今年も）進まない船のようになってしまった。的確な比喩が見どころ。

いつの日かコロナの年の先生とぼんやり思ひ出されるのだらう　関沢由紀子

一年間ずっと画面で授業をつづけてきた中学二年生のクラスのことをうたった今月の一連。教師と生徒、お互い基本的には画面でだけ対面してきたわけである。具体性の欠けた、淡い、イレギュラーな関係。ぼんやり思い出すしかない関係。

春霞やんわり星を包み込み和紙に滲んだように輝く　宮地竹史

子供たちと春の星座を見ている一連中の作。春霞がおおう空を、天体望遠鏡で見ているのだろう。下句、苦心の表現なのだろう。

雲ひとつ無く晴れながら堤防の菜の花よりは暗きあをぞら　松橋雅実

晴れた日の青空が暗い、という思いがけない判断を前面に出して見せた一首。晴れた日の太陽の下で揺れる菜の花畑の明るさが心にのこる。

一世紀に迫る時空を生かされて思ふことなしこの星の上　岡本尚真

もう特に思うことも言いたいこともないという「空（くう）」の状態を表現した百歳近い作者の感慨である。短歌は意味をつたえる詩ではない。歌の究極は意味を超越した、いわば無意味なのだ、という言葉を思い出すような一首。

短歌の現在

No.482　今月の15首を読む

佐佐木幸綱